令和４年度　第２回三島市文化振興審議会　会議録

１　開催日時

令和５年３月１日（水）午後１時30分～午後３時45分

２　開催場所

三島市役所大社町別館　１階　防災研修室

３　出席者

(1)委員…8人／12人中

平野雅彦委員、坂田芳乃委員、籾山好実委員、芹澤博一委員、井島真知委員、杉山朋子委員、坪井則子委員、山形真由美委員

（欠席：岩下晶子委員、橋本由紀子委員、宮西達也委員、小澤和久委員）

(2)事務局…3名

西川産業文化部長、鈴木文化振興課長、菊池文化振興係長、鈴村副主任

４　会議の公開・非公開　　公開

５　傍聴人の人数　　１人

【議事録要旨】

１　産業文化部長挨拶

２　委員紹介

３　会長・副会長選出

会長：平野正彦委員、副会長：坪井則子委員を全会一致で選任した。

４　議事

―これより会長による議事進行―

(1)　文化振興審議会の選出区分について

資料(1～4ページ)に基づき事務局(菊池係長)から説明があった後、次のような意見交換及び質疑応答がされた。

会　長：ありがとうございました。ただいまの事務局説明について、ご意見・ご質問等ありましたら委員の皆様よりお願いいたします。

委　員：４ページに市の審議会一覧があるが、障がい者団体等が入っている審議会が少ない。前回の審議会で市全体として考えていくという意見があったが、

部長級、課長級などで会議の議題にあがってはいないか。

事務局：直接部長会議、部課長会議などで議題にあがったということはない。

委　員：これからの社会は多様性が大切と言われており、なかなか障がい者を省くというのは難しいと思う。市で統一した見解が必要ではないか。ここだけで考えるのではなく市全体として考えていくのがＢＥＳＴではないか。

委　員：私もあえて障がい者枠をもうけるのはどうかと思うが、文化芸術の観点からインサイダーアート、アウトサイダーアートなど美術教育を受けていない人が芸術家としていろいろな活動をしていたり、障がい者の作品を見るととてもすばらしい作品が多い。そこを考えると文化芸術の中では、障がい者支援という形でそういう視点を設けることは大切。そして、障がい者の文化芸術を発掘して発信しようというところも一つ考えていくといい。静岡県障がい者文化芸術活動支援センター「みらーと」という障がいのある人たちの文化芸術を発信していこうという最近広く活躍している団体がある。「みらーと」は、文化の施策推進ということで各県にあり、静岡県も東部は沼津市、西部は浜松市に拠点が設置されている。こんな動きもあるため参考にしていただければと思う。

会　長：委員のご意見は「みらーと」から委員を選出するということではないということでよろしいか。

委　員：障がい支援というのは様々あるので、その一つと考えてもらえればいい。

会　長：前回も委員の皆さんにはお示ししたが、障がい者は、身体障がい者、知的障がい者、精神障がい者、発達障害を含むその他の心身の機能の障がいがあるもので、障がい及び社会的障がいにより、継続的に日常生活、社会生活に、相当な制限を受ける状態になることをいう。そして、このことに限らず、社会的弱者、少数者にも市は目を配っていかなければいけない。そういったときに、どういう人たちが適任なのか。一つに特化したものではなかなか難しい。「みらーと」は先ほど言った障がい者をメインに支援して活動されているのか。

委　員：身体障がい、知的障がいなど障がいについては網羅していくと思うが、ここは美術に特化していると思う。そのため、会長のおっしゃるように障がいや社会的弱者などを網羅したということになるとここでいいかどうかという問題もある。

委　員：特に、この方ということはないが、思うのは、（障がい者にも様々な障がいがあり）その中の視覚障がい者の中でも色々な多様性があり難しい。ある集団の中の多様性という視点も大事にしていかないといけない。例えば、

目の見えない人に作品を触って感じてもらうようにしたけれども、その中でも作品に触りたくない人もいたりする。

委　員：昔、男性だけ（の意見）で（社会等を）回していた時代から女性も参画する時代となった。そういった経緯の中で障がい者も社会の一員として特別枠を作らないということも大切だと思う。そういう方々を受け入れて、敷居を作らないことが大切。音楽会では、音が聞こえない人の音楽会もある。障がい者の方は、健常者では思いつかないことを発想、思いついたりもする。しかしながら、会議の席ということになると少し考えていかないといけない。障がい者と一緒に作品を作っている方などでよい方がいれば入れていくのはいいと思う。

会　長：方向性をある程度出させていただくのであれば、どこかの団体に特化した登用というよりは、現在の委員の方々も障がい者や社会的弱者の方と色々なお付き合いをしていて、係わりを持っていらっしゃると思う。仕事等々活動等々で場合によっては専門家の意見が必要になろうかと思うし、ヒアリングが必要になる場合もあると思う。まずは、皆さんのご経験の中で、様子を見つつ、必要に応じて、あるいは市全体としてどういう方向にしていくかということを併せて、文化振興審議会において、方向性としてはどうかと思うがどうか。

各委員：了承

会　長：課題は大きいが、市全体としての考えを加味しながら、あるいは事前に専門家等々の意見を聞いていくなどの対応をし、特別何か障がいに関わる委員に入っていただくということではなくて、ある意味フレキシブルな運営をしていければいいと思う。

事務局：特に障がいのある方の団体に特化したものではなく、関わりのある方の知見を活かして団体等へのヒアリングを行い、また専門家のご意見等も伺いながら、市全体としても考えていく方向で考えていきたい。

会　長：委員の皆様もいろんな意見を言っていただく時に、障がい者あるいは、社会的弱者など目線を忘れないで、多様な立場の方に寄り添った意見を出していただくといい。

事務局：坂田委員から「みらーと」について提供があったが、各委員の皆様で団体等とのかかわりなどの情報がありましたら、事務局へ是非教えていただきたい。会長のおっしゃったように（団体への）ヒアリングを行ったり、どういった活動を支援していけるかということを含めて俎上に載せていきたいと考えている。

会　長：三島市に限らず、場合によっては、他市他県社会的状況を見つつ委員の皆様の意見を頂戴したい。

(2)　文化振興審議会開催回数について

資料４ページに基づき事務局(菊池係長)から説明後、質疑なし

会　長：開催については、状況によってフレキシブルに対応していただくこともあると思う。皆様には、じっくり三島市あるいは他市との比較などを観察していただき、場合によっては事務局に情報を入れていただき、会長、副会長への共有していただくなどの臨機応変な対応も必要かもしれないが、基本的には事務局のおっしゃったように進めていただければと思う。

(3)　令和４年度文化振興事業について

(4)　令和５年度文化振興事業の予定について

資料 6～12 ページに基づき事務局(菊池係長)から説明があった後、次のような意見交換及び質疑応答がされた。

委　員：せせらぎ音楽祭はいいイベントだと思う。せっかくあれだけのトップアーティストの方達が来ているのに取り組み方がよくない。クラシックが似合うまちにしようといっている割には、もっと PR をした方が良い。実行委員会なり今後継続していこうというのであれば、もう少し、出演者の心意気がもっとストレートに伝わった方が良い。協賛金を集めているようだが、自分もあれだけの値段でできるのかな？と思っていた。取り組みをもっとよくするといい。

委　員：うちでの楽器店でもチケットを取り扱った。販売の出足も好調だったと思う。

事務局：まず、組織は実行委員会がメイン。今年度は第３回。第１回目は、本当にコロナで演奏家の活動の場がない時に、三島でやらないかということで文化庁の事業として県の総合健康センターで演奏会を開催したのが始まり、その時に演奏家の皆さんが三島を大変気に入ってくださって、三島への恩返しをしたいということで、昨年度、第２回目を開催し、第３回へ繋がった。委員からお話があったように、第１回目から第２回目を実施する時に実行委員会を組織した。その際、実行委員会の中心となるところがない中で、関係者を集めて組織した。そろそろ実行委員会自体も見直しを図って

いかなければいけない。このまま市の共催事業として実施していくならば、組織的なものの見直しが必要。行政としての関わり方も課題。そこを整理しつつ、次回に向けては組織を見直す中で、もっと続くための取り組みをきちんと整理していく必要がある。費用については、市民の皆様にできるだけ来ていただいて鑑賞していただきたいという思いから設定している。首都圏で同様にコンサートをするには倍程度かかるのではといわれている。現在1部を2,000円。2部は4,000円とし、2時間半程度演奏会。チケット代については、市民の方へ間口を広げていくということと、運営の面取り組みの両面を考えていかなければいけないので、そういった視点を実行委員会へも提案していきたい。ある程度、市としてアーティストを認知してもらう取り組みを実施していかなければならないと考えている。

委　員：料金設定の話についてだが、美術館でやるときも悩む。せせらぎ音楽祭のチケット代もクラシックをよく聞く方であれば、安いというかもしれないが、初めてだったり、普段あまり聴かない方については高いということもある。美術館でも少し料金が上がるとガクッと申込みが減ることがある。料金の妥当性のようなものを知ってもらうことも大切。

委　員：確かに料金設定は難しい。例えば、海外にいた時に、ちゃんとした演奏会だが、学生は立ち見でフリーで聞くことができた。観光客はフリーで1曲だけ聞いてもいいし、ちゃんと聞いてもいいというような工夫がされていたりする。たまたま来てちょっと聞きたいということでも受け入れられるし、しっかり聞きたいかたは正規の料金を支払いきちんとした心づもりで聞くことができるという事例もある。

委　員：料金の設定についても多様性をもたせるっていうことが大切。

会　長：ヨーロッパの演奏会は料金体系が多様。様々な係わり方がある。教育と結びついていたりする。アーティストには極力適正価格で支払ってほしい。またやってみようと思える演奏家への評価の一つはフィーであるため、そこは死守しつつ、市民の状況も読むハンドリングが大切。料金体験の多様化。また、もう少し中期的にみていくことも大切。

事務局：先ほど、無料料金の対応について、料金に段階を持たせるという話ですが、現在、実際に取り組んでいる無料の取り組みとしては、イトーヨーカドー（日清プラザ）で大体1時間程度のミニコンサートをやっている。そこで、当日のダイジェスト版みたいなところでやっている。そこでこの演奏家の方の演奏を聴きたい方がいたら、実際足を運んでくださいねということでやっている。先ほど申し上げた通り、1部は、ある程度安価な料金設定を

して、クラシック初心者の方対象とし、２部はもう少し金額上げてということでチケット料金については、きちんとアーティストの評価に合ったみあった金額、その適正な金額というのを取ってもいいんじゃないかっていう声もあるので、そこは音楽だけでなく、美術などでも同様に、皆さんのご意見を参考に実行委員会へなげていきたい。

委　員：情報発信については、今まで届いていない層、若者世代へきちんと届いていたのかな？ということを感じた。当事者だけが知っているということではなくて、やっていることがどこまで届いているかということが媒体者として気になった。今これをやることが目的ではなくて、届いていない世代、若者に、この事業を引き続き継続していくことが、三島市に根付いていくことが大切だと思う。広報で発信したから大丈夫ではなくて、市の予算以外でできること。例えば、関係者にWEBで発信してもらうなど、手法を考えるといい。自分達もマーケティングをしているが紙媒体で届くことは少ない。発信する時に今までと違うところを考えている。文化を発信するにあたってはそういった工夫も必要ではないか。

委　員：せせらぎ音楽祭の実行委員の中には広報のプロのような方がいらっしゃるのか。

事務局：実行委員の中には、そういった方はいない。演奏家の方、商工会議所や観光協会の方などになっていただいている。

会　長：広報の問題も課題が大きい。

委　員：校長会にもＰＲに来ていただいたが、小学生の場合、実際に訪問コンサートに来てもらった学校の児童は行こうという気持ちになるかもしれないが、訪問コンサートに来てもらっていない学校の児童については、なかなか校長からの声掛けだけでは難しい。やはり本物を見て、聴くことによって行ってみようかなとなるのでは。訪問コンサートについては、演奏家の方がこの学校がいいということであれば仕方ないが、できれば是非同じ小学校だけでなく、ローテーションを組んだり、巡回のようなかたちで実施してもらえるといい。

会　長：印刷物ではなく、ネット上にという話もあるが、周りを見てみると、まだ、印刷物で見て、気になったらWEBへアクセスという形かなと思うので、印刷物を無くしていけるかというとそういうわけにもいかない。

委　員：（自分たちのイベントの）アンケート結果をみると、WEB上で申し込みをしたり、参加表明している人も、最初に何で知りましたかという問いには、紙媒体で知ったという回答が半数以上。そのため、紙媒体も大事。様々な

調査をしながら広報をしていくことが大切。

会　長：最近はWEBでもテレビでも画面にＱＲコードが掲載されていて画面にスマホを向けている人が多くなった。今はミックス状態。

委　員：紙媒体で情報発信するにもそこに色々な方法で情報発信してますよという情報が必要。

会　長：媒体によってはネット上に集約した方がいいものもある。

委　員：WEBについて、学生達に聞くと、一口にWEBといっても大人の見るWEB媒体と、学生達が見るWEB媒体は全然違う。若者はFacebookは絶対見ないという。WEB の中でもターゲットを絞った媒体選びが大切。また、若者は自分から検索をしない。入ってくる情報を見るため、検索能力も低下してくるのでは。色々な媒体を使用していく必要がある。

委　員：自分たちもどういう媒体を使用するかということは苦労している。人によって使用する媒体が異なるとなると、自分たちが対象とするターゲットはどこかというある程度絞り込んだ広報をしていかないとターゲットにぶつからないなと感じる。紙媒体は目次みたいなもの。良さは1週間経っても2週間経っても情報が残っているということ。WEBは時間で更新されていくため、そこをどう上手く使うかが大切。申し込みやアンケートをQRコードでするということは一般的になりつつあると思うが、昨年 11 月に下水道課と協働して、子ども達200名程度集めたが、この申込みはほとんど紙媒体だった。

委　員：広報みしまはとても貴重な紙媒体。紙の良さは今は見ないけど後で見ることができるということ。それが三島市全戸に配布される。自分が見ていなくてもこんなこと載っていたよっていう口コミにも繋がる。

課　長：一つは広報と広告の違いを意識しておかなければいけない。

　また、SNSといっても色々なSNSがある。日本はLINEが圧倒的に多い、次に、その半分程度がTwitterの使用者。そのため、広報をする時は自分がやっているから相手も見ているだろうではなく、そういった広報の仕方について、少し丁寧にターゲットも見極めていくことが大切。

委　員：文化振興支援相談について、今年度始めてどういった相談が多いのか。相談の中で気づいたことで、今後に向けて課題が多いと思うが、自分たちも相談業務をしているため参考にさせてほしい。件数が少ないからどうかと思うが。

事務局：以前に審議会でもご意見をいただいて、つなぐ窓口が必要なんじゃないかというところで、まずはどうしたらいいんだろうということを受けて、例

えばこういうことやりたいと相談に来た方に対して坂田委員にご相談してみたらいかがですかっていう、つなぐ機能として、始めたということがある。どういう相談内容については、イベントをやりたいがどんな場所があるか、絵を展示したいが場所はどういったところがあるのということが多い。市も（相談を繋ぐためには）つなぐ先の関係団体を知らないといけない。つなぐ先を把握しきれていないことは課題。何か相談があった場合、ここに繋げばいいヒントが得られますよというここの部分が把握できていないので、そこを把握するのを登録制にするのか、そのあたりを考えていかなければいけない。

委　員：アート相談は地道だがとても大切。アートと街がどう関係を作っていくのかが大切。自分たちの相談も件数が伸びてきていて 1 か月に 8～10 件程度ある。一度相談に来た方からあそこに行ってみたらといいよと口コミで来る方もいれば、同じ方が何回も来たり、中には相談先まで一緒に行って対応したりもした。そのため、相談は割と時間がかかる。そういうきめ細かさが求められる。アートと地域産業が繋がるような手立てがないか考えている。ちゃんとアーティストにアーティストフィーを支払うということが、（アーティストもしくは事業の）評価になる。アーティストが地域の中で活躍したいけれども、それが仕事となるか地域貢献になるかで大きく違う。アートと産業が繋がると何か化学反応が生まれるのではと思うが、どう繋がればいいかは私自身分からない。

会　長：私も県の文化財団やアーツカウンシルの相談役員をしており、様々な相談がある。参考として、よくある質問をサイトに掲載しておく。そうすると相談者が相談をする前にここで同じ課題だよねと気づくことができる。少し面倒だけれども構築していくのも一つの方法ではないか。そうすると相談件数は少なくなってしまうのではないかということになるが、そのページへのアクセス数を分析していけば、相談窓口を気にしている人たちがこれだけ利用しているということの数値の証拠になっていく。そういった形で対処していくのも一つの方法だと思う。相談窓口の可能性は中長期的にみていく必要がある。県のアーツカウンシルなども一つの参考にしていただければ。

委　員：先ほどの訪問コンサートについて、同じ市内の小学校へ通っていて、学校によってコンサートの機会があったりなかったりというのはあまりよくない。過去の学校への訪問について一覧なったものなどがあればいただきたい。

委　員：そういったものがあるかは分からない。

会　長：できるだけいろんなところへ回っていただけるようにいろんなところに種をまいていく。そういう取り組みは三島で多く取り組まれていると思う。

委　員：学校の方針やカリキュラムによって学校への受け入れに差はあるのか。自分が県にいた時には教育委員会を通して学校への働きかけが難しかった。そこの原因がわからないままだったが、今沼津でスクールミュージアムのようなものができないか考えているが、学校の受け入れがどうなのかということが前提としてあるので、もし参考になればと思うので教えていただきたい。

委　員：せせらぎ音楽祭の訪問コンサートの希望は各小学校へとったのか。

事務局：小学校全校へ希望は取らせていただいた。その中で希望のあった４校へ訪問コンサートを実施した。昨年は佐野小、坂小の２校。今年度は佐野小、坂小、北小、南小の４校。

来年度はまた小学校へ希望をとって、演奏者との調整をして決定させていただく予定。

委　員：演奏者の都合にもよるが、できるだけ前年度と重ならない形で調整していただけるといい。要望できればお願いしたい。

委　員：そよかぜ学習という学校への出前講座があり、佐野美術館も講座を実施しているが、実施している学校はあまり変わらない。一度経験して継承されるとやりやすくなったり、もしくは時期の問題もあると思う。学校によってカリキュラムをどこにあてているのか分からないが、いつも同じ学校だと思う。先生が変わっても実施するのは同じ学校だと思う。

委　員：初年度の立ち上げの時に熱心な先生などがいると、最初の提案があったときに手を挙げて、実施すると、先生が変わったとしてもそれが引き継がれて固定化しやすいと思う。

会　長：場合によっては、時期を変えてみたり、いつならできるかなどヒアリングし直してみるのも一つの方法では。

(3)　その他

事務局：担い手の不足についての課題をどうやって解決していったらいいか、皆さんのお考えをお伺いしたい。市議会の予算委員会においても文化団体での今後の継承の仕方について、質問があった。若者について日大生や高校生などをどうやって巻き込んでいったらいいか。将来に向かって若い人たちをどうやって巻き込んで参画してもらったらいいのか。

委　員：（自分達も）若い人たちにサポーターになってもらいたいと思っているが接点がない。長泉町の知徳高校に生活デザインの学科があり、先生に相談したところ、前年12月にカリキュラムを決定するため、その時に社会参加や地域貢献について選択をする。そういう時期に相談してもらえると授業として取り組むことができる。また、交通費や昼食代程度をみてもらえると参加させやすい、ということであった。また、大学の場合は、事業自体に参加してもらうというよりは、その事業をどういう風に方向づけるかというような研究にしてもらうと大学の先生がゼミの生徒さんを連れてきてくれたりする。自分たちのワークショップはちゃんとしたプログラムになればどこでもできるようになるというようにしたい。アートの教育は門外漢のため大学と連携して一緒にワークショップをやって、その中で大学の先生や学生が来てくれて検証してその先を考えるということになればいい。単純に手伝ってもらう、担い手をというよりは、この先この団体をどうやって成長させるかという中で、大学と一緒に研究していくということが考えられるのではないか。

委　員：学生や若者の意見を求めたいところに積極的に呼びかけていく。学生枠や先生方にご推薦をいただくのもいいのでは。学生達がこの会議などに入っていただくことによって、より具体的な情報発信も得られるのではないか。積極的な呼び掛けの努力が必要。

委　員：美術館でも１週間程度学生の実習をやるが、ここ数年はPCを持ち込んでくる学生が多い。そのままでは使えないが、少し手を加えるととてもよくなる。授業にもなっているので一生懸命やる。参加して下さいだけだと学生は手がかかるため、先生も一緒にいれてやった方がいい。それと、若い人といってもどのくらいの年代か。そこにも幅ある。デザインの学科がある高校などは地域の商店街ともかかわりがあるのでは。

委　員：若者に審議会へ参加してもらったりという話があったが、市としての考えは団体の継承であったり、市全体としての文化を考える場に参画してほしい、というようなことであると思う。そうであれば、高校生なり大学生がオブザーバーとして会議に参加してもらったり、それに特化した会があってもいい。それとは、別に今の若い人は自分で何でもできるツールがある。手順を踏んで、いろんな人と調整して、また来年もやって、その次の年もやって３年計画でといった場合、果たして付き合ってくれるかなという心配もある。若い人が何を求めて、どう生きているのか分かりづらくなっている。誰というのは何もないが、間を繋ぐような人がいるといい。

委　員：語弊があるかもしれないが、なぜその団体を継続させたいのか。市としてそれが必要なのか。もしかしたら、淘汰されていくもので、違う形のものが生まれているかもしれない。こちらが変わらずに若者来てくださいというのは違うのではないかなと思う。今、私の年齢で文化団体に参加しようかと思うかっていうと仕事（をしていて時間が無いなど）もあるが、身近でない。母親も地域で文化協会に所属おり、80 代だが若手と言っている。いきなり 20 代の人が入ってもそこにいられるかどうか。そもそもどうなのかという気がする。

委　員：今の若い人はどういう団体があって、何をやっているか知らない。そこをまず明確にして発信してあげるといい。

委　員：No User インタビューというのをよくやる。なんであなたは知らないの？なんであなたは参加しないの？なんであなたは新聞をとらないの？なんであなたは SBS 学苑カルチャーセンターにこないの？ということをものすごい数インタビューをとる。それも一つ参考になれば。

委　員：この議論はすればするほど言い訳になってしまう。我々の団体も組織数が減ってきている。毎年議論にあがっているが解決が難しい。お茶、お花など習い事に来ない。そのうち茶会も開催できなくなってしまうのではないかと心配だが、今のところ茶会はあちこちで開かれている。議論だけはするが、どうしたらいいという解決策はない。

委　員：違う話になってしまうかもしれないが、刀剣についてブームになったが、あれは美術館、刀剣側からは何一つ働きかけていないところからいきなりブームになった事象。未だに続いている。刀剣展の人数と客層が 180 度変わった。全く想像しなかった。ゲームが配信された日から増加した。そのため、内部からの働きかけではなく、外からの力で生まれることもある。

会　長：様々なご意見があるかと思うが、当事者がいない中で話をしてもどうか。学生や若い世代に特化した会があってもいいのでは。

５　閉会